

---

# 不幸の歯車

さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸の歯車

### 【コード】

N0136L

### 【作者名】

さくら

### 【あらすじ】

狼族と吸血鬼の混血とゆう理由でイジメを受け続けてきたダンはある時親に黙って島を飛び出した。  
そして田舎町のローライの学校に通っていた。  
その理由はイジメを受けないためと・・・

## 人物紹介

### プロローグ

魔法や変わった生き物のいるこの世界  
まるで絵本のような世界にも偏見や差別はある・・・  
そんな世界に生きる人たちの話

### 人物紹介&不幸の齒車の用語

『不幸の齒車の用語』

『狼族』

十数年前に見つかった種族

狼に変身できる事から危険だと言われている

『吸血鬼』

通称闇の一族

魔法があるこの世界でも、架空の存在だと言われている

『サン』

狼族の住んでいる南国の島

『混血』

普通の魔法使い以外の者の血が混ざっている者をさす

『不幸と幸運の齒車』

絵本の題名

『ローライ』

ユキさんの家や転校して来た小学校などがある田舎風な町

『登場人物紹介』

『ダン』

この不幸の歯車での主人公

吸血鬼と狼族の『混血』とゆう理由でイジメを受け続けてきた哀れな少年

八歳の時に故郷の島から出て行く

『ユキさん』

ダンを浜辺で助けた老婆

の命の恩人でもありの良き理解者

『アイツ』

ダンが6歳の時に会った同い年の少女

家族以外で唯一ダンを偏見の目で見なかった者  
名前は不明

『サナ』

後々仲良くなつていくクラスメイト

6歳の時に会った「アイツ」に良く似ている

『その他』

『ゴッツ』、チュー太、ガリベン』

転校して来たをダンが一番最初にイジメた三人

『先生』

ダンのクラスの担任の女教師



## 第一部

\*は回想

今日から俺はこの小学校へ転校して来た。

親の事情なんかじゃなく・・・それどころか親の了解も無いのだから

『大丈夫？調子悪い？』

伏目がちに廊下を歩いていたら俺に、先生は心配顔で聞いてきた。

「大丈夫です」

俺はなるべく声を明るくし答えた。

『それならいいけど・・・』

先生は返事を聞いても、まだ不安らしく表情を曇らしたままだった。俺は無言で窓の景色を見ながら家の事を思い出していた・・・もう二度と戻りたくない故郷の事を・・・。

\*「自分が思っていたイメージの「怖い」とか「危険」だってイメージは無くなって、優しい子だなんて思ったよ。

だからその子の家族をきつと優しい人たちだって・・・」\*

「あつ・・・」

最初に思い出していたハズなのにいつの間にか、「アイツ」の事を思い出していた。

四年前・・・六歳の時に出会った一人の女の子・・・俺の事を「優しい子」だと言った変な奴だった。

でも、アイツの言葉は優しく、暖かいものだった・・・俺は素直にその言葉を受け入れる事が出来た。

今まで自分を褒めていくれるのは「家族」だけでそれ以外の「他人」

は自分の事を汚すだけだと思っていた。  
周りにいる大人だつてそんなだった。俺の事だけじゃなくて家族の事までも汚してきた……。

元から俺は普通じゃ無かつた狼に姿を変えられる『狼族』この種族の血が入っているだけだけでも普通じゃ無かつた。俺はその血に『吸血鬼』の血が入つた、『混血』だつた……。

そのせいもあつてか俺は同じ『狼族』にも差別を偏見の目で見られた。そんな卑怯な大人を見続けた来た。

最初は「大人」が信用出来なつた……。でも、だんだん家族以外の「他人」が信用できなくなつていった。唯一の友達ともいえる三人の幼馴染も信用出来なくなつていた。

そんな誰も信用出来なくなつた俺の前に現れたのがアイツだつた。

## 第一部（後書き）

こんな駄目文を最後まで読んでいただきありがとうございます  
殆ど趣味で書いているので、変な内容かもしれませんが・・・。  
よければ第二部もお読みください

## 第二部

四年前俺が六歳の時・・・。

突然母親に買い物に連れ出された。いつもの俺ならきつと嫌だと言つて家からは絶対に出なかつたはずだ。でも、あの時の俺は違つた・・・。島から船で二時間半も掛かる町に俺はついて行つた。周りの大人はやはり俺を見てコソコソと喋っていた。

狼族の子供は魔力が安定するまでは狼の耳と尻尾が出ている。その理由もあつて俺はかなり目立つた。良い意味での目立ちでは無かつた・・・元から危険だと言われていた狼族の子供が普通の町に来ているのは普通ならありえない事だからだ。

町でも故郷の島でも俺は偏見の目で見られた・・・島じゃ混血とゆう理由で・・・町じゃ狼族とゆう理由で・・・混血と言つ真実も狼族も全て変えるこのとの出来ない真実だつた。

誰も信用できないそんな事を思いながら町を歩いてた俺に声を掛けたのが「アイツ」だつた。

町に来て誰かに声を掛けて欲しいと思つた事は無かつたが、周りにいる大人よりも差別や偏見で見なかつたアイツに声を掛けられたのが俺の一番の救いだつた。

『おーい！聞いてる？』

「え！あ、はい！！」

考え事をしていた俺の頭は先生の呼び声によって現実に引き戻された。

『教室に着いたよ』

先生は俺が戻つてきたのを確認して何かを指差した。

俺は無言で指をさした方を見た。そこには『4-2』と書かれた札が掛かつていた。

もうここはサンの学校じゃ無い事を改めて分からされた気がした。

『じゃあ呼ぶから待っててね』

先生はそう言って教室に入って行った。

この間が辛かった……。ろくに人と接していない分新しい奴らとどう付き合えば良いのかと考えて緊張を紛らわしていた。

『入って』

先生の声から教室の中から聞こえた。

もっと遅くても良いのにな……。と先生を恨みながら教室に入った。

## 第二部（後書き）

第二部です。

またこの話を読んでいただきありがとうございます

更新は遅いですが・・・よければまた第三部もお読みください。

### 第三部

『え、転校生のダン君です』

「よろしく・・・」

俺はかなり無愛想に挨拶をした。後々何でもっと明るく挨拶が出来なかったのかと後悔した。

『それじゃあ皆仲良くね！えっと席は・・・あの空いてる席に座って』

先生は窓辺の一番前の席を指差した。

もっと目立たない席は無いのかと言いたい気分だったが、教壇の前よりかわマシだと思いつながら席に着いた。

『じゃあ一時間を始めます』

一時間目は意外と面白かった。自己紹介だけで時間が終わったからだ。

サンの学校でも転校生は多かったせいで何度も自己紹介をさせられた思い出があった・・・。

『これから五分休憩にします』

先生のその一言で俺の緊張は一気にほぐれた。

ただ自己紹介を聞くだけでもかなり緊張していた分、『五分休憩』が安息の時間のように感じた。

「ねえダン君！！」

「え！！！」

突然の一言に自分の事だと分かるまで数秒掛かってしまった。

「何度も呼んだんだよ！全然気がついてくれなくて」

そこにいたのはポニーテールの女子だった。

『え、あ・・・悪い・・・』

「気にしなくていいよ！そんな事よりもダン君ってどこから来たの

？」

「え……」

突然の質問に俺は戸惑った。

元からこの質問は答えたくなかった。狼族の住む島のサンのイメージがかなり強い分、一気に空気が気まざるのが予想出来たからだ。

「どこから？」

「サンから……」

俺はかなり遠慮がちに質問に答えた。

「へへあの南国のサンから来たんだ！だから肌が日焼けして黒っばいだね」

俺は意外な返事にかなり驚いてしまった。もつと「狼族の住む島から来たんだ……」と気まざると思っていたからだ。

「良いな！サンに住んでたんだ・私も住んでみたいな」

俺はコイツの言葉に驚きを通り越して、呆れてしまった。わざわざ危険な狼族の住む島に住みたいと言うのは学者か馬鹿しかいなかった。

「お前……狼族の住む島に住みたいのか？」

「うん！」

馬鹿だ正真正銘の馬鹿だった……。

「だつて狼族の人は皆優しいから……！」

俺は自分の耳を疑った……。転校当日で俺の事を全く知らないはずなのに……前にアイが言った事と殆ど同じだった。

「小さい頃に狼族の子に会った事があるんだ……その時に助けてもらつて……だから狼族の人は皆優しいのかな……」

似ていた……。『アイツ』にそっくりだった。馬鹿で……人が「え！？」と言いそうな事を笑顔で言ってくるころは同じだった。

「なあ……お前名前は……」  
「はい！五分休憩は終わってるよ！席に着いて」

「それじゃあ・・・また休み時間に話そうね」

そう言つて席に笑顔で席に戻つて行つた。

もう少し話をしていたかつた・・・。もしかしたら6歳の時の『アイツ』かもしれない・・・とゆう根拠の無い期待があつた。

その為か五分休憩が終わりだと言つて席に着かせた先生が一瞬悪魔に見えた。

でも、休み時間にまた話す事が出来る・・・そうすれば『アイツ』かコレで分かると最初は思つていた・・・。

## 第三部（後書き）

第三部です。

本当に最後まで読んでいただきありがとうございます。

まだ、続く長い話になるかもしれませんが、よろしく願います  
もし、感想やご意見ある方はよければお書きしてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0136/>

---

不幸の歯車

2010年10月22日19時44分発行